

『ずっと友達でいてね』と

言っていた女友達が

友達じゃ
なくなるまで

This is the memory until the girl who said
"Please be my friend forever,"
is no longer my friend.

3巻刊行決定記念 書き下ろしショートストーリー

GA文庫

岩柄イズカ

イラスト maruma (まるま)

Story by Iwatsuka Izuka Art by maruma

「う…………ど、どうしよう……」

学校から帰ったゆいは自分の部屋でベッドに腰掛け、途方に暮れていた。

先日、優真^{ゆうま}の家に泊まりして以来優真の様子がおかしくなって。

そのことを飛鳥^{あすか}に相談したら『好き避けだ』と言われて。

それを意識して優真と上手く話せなくなってしまうところに『キスしそうになった』なんて言われて、ゆいは完全にキャパオーバーに陥ってしまった。

だって、優真は自分にキスしそうになったのだ。

それはつまり、優真は自分のことを女の子として見ていて、キスしたくなる相手だと思っていて、あともう少し何か違えば本当にキスしていたかもしれないわけ。

……ついそのシーンを想像してしまってた恥ずかしくなってしまった。

(だ、だからわたしなを考えて……………)

ぶしゅと頭から湯気が出そうなくらい顔をまっ赤にして枕に顔を埋める。この間からもう何度自爆を繰り返したからわからない。

(でも…………あと、もうちょっと……………なのかな?)

元々『優真が好きになつてくれるように頑張ろう!』といろいろやっていたのだし、優真がキスしたくなったというのはその行動の成果と言えるかもしれない。

だから、勇気を出すなら今だ。あともう一歩踏み出せば優真の恋人に……と、思っているのだけど、優真のことを考えるとやっぱり恥ずかしくて何もできなくなってしまう。

何か、何か最後の勇気を出すきっかけが欲しい。

——と、そんなことを考えていた時だった。コンコンと扉をノックする音が聞こえた。

「ゆい? 入っていいかしら?」

「……ん、いいよ」

そう応えるとガチャリと扉を開けてゆいのお母さんが部屋に入ってくる。……その表情はどことなく真剣な表情だった。

「お母さん、どうしたの?」

「えっとね。この前ゆいがユーマ君の家にお泊まりして以来、何か様子がおかしいから少しお話を聞きたいなって」

「……あう」

そう言われてまた恥ずかしくなる。なるべくお母さんとお父さんの前ではいつもと同じ風を装っていたのにとくにバレていたようだ。

「その反応、やっぱり何かあったのね?」

「その…………あった、ことは、あった…………けど……」

ゆいは口をもごもご動かす。

けれど、見ようによつてはこれはいい機会かもしれない。

ゆいのお母さんとお父さんは高校生のうちに結婚した。言つてしまえば恋愛の大先輩だ。

もしかしたらこんな時に有用なアドバイスがもらえるかもしれないし、なんなら告白のために背中を押してもらえるかもしれない。

一方のお母さんは何やら深刻な顔をしていた。額に手を当てて『お父さんにはまだ言えないわね……』などとブツブツ呟いている。

「お、お母さん？ どうしたの？」

「いやね？ ……聞きにくいことなんだけど、女の子にとつてすごく大切なことだから聞くわね？」

「う、うん？」

「その……ユーマくと、えっちなこと、した？」

「へ？」

ゆいは言葉の意味がわからず目をぱちくりさせる。……そして少しかつてお母さんが何を心配しているのか理解して、ボツと火がついたようにまっ赤になった。

「ち、ちがうから！ そういうのじゃないから！」

「隠さなくてもいいのよ？ お母さんはゆいの味方だからね？」

「だ、だからホントに違うから！ ユーマとはキスしそうになっただけで……」

「その話くわしく！」

「~~~~つつ！ も、もういいから！ 出てって！」

そう言つてゆいはお母さんの背中をぐいぐい押して部屋から追い出してしまった。

ちよつと強引な自覚はあつたけれど、ただでさえキャパオーバーしていたのにそんな話をされたら堪えられない。

（もう……！ お母さんはホントにもう……！）

熱いままの頬に手を当ててしばらく部屋の中を意味もなくウロウロ。

でもそんなことじゃ恥ずかしいのは消えなくて、気を紛らわせようとパソコンの前に座りグランドゲートを起動する。

グランドゲートが始まってすぐにフレンド欄を見る。優真が今はログインしていないのを確認するついでにホッとしてしまった。今はちよつと、優真と顔を合わせたくない。

冒険に出かける気分でもなかったのでユーマとシユヴァルツが暮らす家でアイテムを整理していく。

気持ち落ち着かせるように深呼吸しながら回復アイテムを調合したり足りないアイテムを買いそろえたり。そうしていると少し冷静になってきた。

一息ついて『他にやり忘れたことないかな？』と一つ一つ確認していく。

（……あ、そういえばゴタゴタしてユーマとの子供作りのやってなかったな）

ふとそんなことを思い出す。

優真の家にお泊まりしたとき、ユーマとシュヴァルツの子供を作ろうとしたのだがネネが変な勘違いをして部屋に飛び込んでくやむやになってしまったのだ。

——今思うと、ネネもお母さんも飛鳥も、全員同じような心配をしていた。

……よく考えてみれば、もしかして、男の子を家に泊めたり男の子の家に泊まったりって、そういう心配をされても仕方ない行為なんじゃないだろうか？

そんなことを考えるとせっかく冷めてきた頬の熱がまた一気にながってしまった。

（ち、ちがうから！　そういうのじゃないから！）

誰に言い訳しているのかわからないが心の中でそんなことを叫ぶ……と、その時だ。ピコンと通知が来て、いつの間にかログインしていたユーマからメッセージが来ていた。

「~~~~~つつつ!!」

それを見た瞬間、ゆいはほとんど反射的にゲームからログアウトしてしまった。ちよつと今は、たとえゲームの中でも優真と顔を合やすのは無理だ。

こうして結局、恥ずかしいのがさらに悪化してしまった。

ゆいが優真と元通り話せるようになるのは、もう何日か後の話。